

鶯 遲

梅か香をたもとにまめて鶯の里やいつこと尋ねゆかまし
氷川子

稼堂陳人評 古人の意をさりて痕跡なし妙

全

梅の花散りそめにけり我宿になど鶯の未た來なかな
松露生

全

散る花の匂ひを送る風もかな谷のうくひす未た來なかつ
江楠生

蘇山殘雪

消え殘る雪も霞にとさゝれてのどかに見ゆる阿蘇の遠山
氷川子

全

長閑なる阿曾の煙のすゑ遠く消々殘る峯のまらゆき
松露生

全評 消々の二字句中の岐路

全

けふりかと阿そのみたけを眺むれば霞の上に殘る白雪
襖川生

全評 阿蘇の煙は白きゆゑめくいふなるべし

霞中山

棚引ける霞の奥の山々ハ波路はるけき嶋かどそ見る
氷川子

全評 斬新

全

立こめし霞のそこにはの 見えて 色いや勝るをちの山々

江楠生

全

春來れは阿蘇の山邊の雲さへも見ぬはかりに霞棚引く

蝶々子

全

山々は霞の衣ねはひけり花も梢も中にこめつゝ

松露生

全評

山々さ起して花も梢もさ結びたる斤度を見る

全

春霞たなひき渡る山の端のはの見ゆるこそ長閑かりけれ

禰川生

全評

げにも然り味はほの見ゆるにあり

若菜

里の子の雪かき分けてくる春に、れ、れ、ぬ、若菜けふはつむらん

氷川子

全

春雨によしやたもとのぬるゝとも出てゝつまなん野邊の若草を

蝶々子

全

嬉しさをかたみに包む乙女子か袖の下より見ゆるわか草

江楠生

全評

袖の下より面白し

全

松露生

乙女子かつゝむにあまるうれし野の若菜つみつゝ歸りゆく見ゆ

全

襖川生

里の子かいてゝ若菜をつむ頃ハわかしめし野と隔てやはする

全評

太平の御代の氣象見ゆ他日來風の數に加はらんは必ずこのやうの歌なるべし

柳

蝶々子

いつしかも春の柳の糸よりて霞の衣れり出しけん

全評

巧綴

初春水

江楠生

今朝ハはや結ひし氷とけ初めて波の花咲く谷川の水

全評

春風春水一時來

叔弟萬平墓表

代伯氏

内田周平

叔弟萬平。以萬延元年正月十九日。生于濱松。明治五年三月。遊于東京。七年五月。入外國語學校。十年四月。遷大學醫學部。十六年九月。咯血發疾。調養半歲。十九年十月。業成。尋入大學院。專攻外科。二十年六月。補大學助手。二十一年五月。皇后臨幸大學醫院。萬平施術乎患者。以供御覽。七月。辭還鄉。途咯血疾復作。而遠邇聞其名。來請治者日衆。二十二年八月。病漸篤。十月五日。歿于家。得年三十。葬于天林寺。歿前六日。舉一男。曰義太郎。嗚呼叔弟。自幼依吾以成長。情猶子之於父。常念恢弘吾業。以隆家聲。高等中學。縣病院等。聘皆